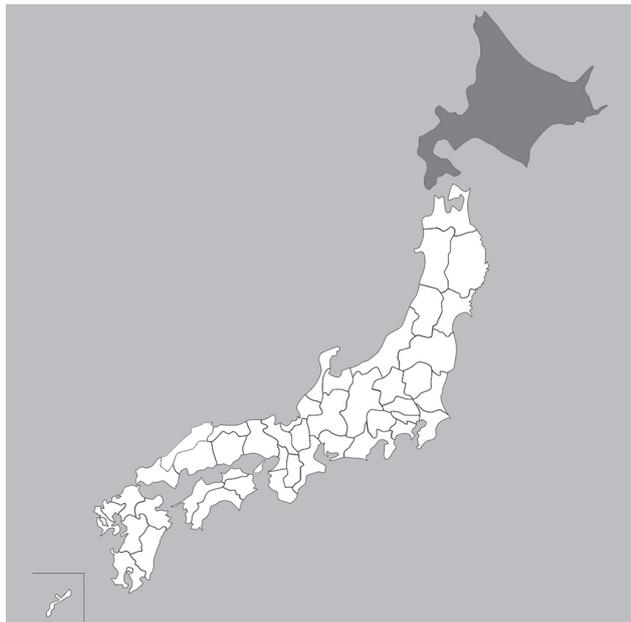


先進自治体調査

北海道 千歳市



自治体基礎データ

人口（2018年5月1日 or 4月末） 96993人

面積 594.50km²

未就学児童数（5歳以下）と世帯数（平成30年4月1日現在）
5220人

出生数 2016年度：897人 2017年度：804人

合計特殊出生率 2016年度：1.52 2017年度：1.40

人口流出数 2016年度：339人 2017年度：338人

未就学児童の年齢別数と保育状況（2018年4月時点）

5歳児：1号認定 520人 2号認定 205人 在宅 161人

4歳児：1号認定 501人 2号認定 210人 在宅 178人

3歳児：3号認定 411人 2号認定 252人 在宅 218人

2歳児：3号認定 277人 在宅 626人

1歳児：3号認定 237人 在宅 620人

0歳児：3号認定 69人 在宅 735人

保育所待機児童数

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】

（2018年4月時点）

保育所待機児童数：0人

保育園：公立 0件、私立 3件

認定こども園：計 12件（公立 2件、私立 10件）

（幼保連携型 12件、幼稚園型 0件、保育所型 0件、
地方裁量型 0件）

幼稚園：公立 0件、私立 8件

子ども・子育て支援関連予算額

2016年度：8260282千円

2017年度：8700416千円

それぞれの施策を進めるための庁内体制について（庁内組織数、参画部署名）

庁内組織数 19部局中参画部署 8部 24課（参画部署名：企画部、市民環境部、保健福祉部、こども福祉部、産業振興部、観光スポーツ部、

建設部、教育委員会）

子ども・子育て支援事業について（地域子育て支援13事業及び母子保健の実際）

地域の子ども・子育て支援13事業（29施策）の内、「実費徴収に係る補足給付事業」を除く12事業及び母子保健（母親と子どもの健康増進 24施策）について実施中。

参考）5歳児人口 886

4歳児人口 889

3歳児人口 881

2歳児人口 903

1歳児人口 857

0歳児人口 804



千歳市役所

1. 子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容

千歳市総合計画の柱のひとつとして、平成32年度までに人口を97,000人に増やすことを掲げ、計画よりも約2年前早い本年4月に達成。現在は100,000人を目指している。その一方、「子育てするなら、千歳市」を平成26年度から標榜、現在46事業を進めている。

・**ちとせ版ネウボラ** 切れ目のない支援。孤立する親が多く、補正予算を組んで平成28年10月にスタートさせた。

母子手帳交付時に、必要な情報を満載したネウボラファイルを配布。時期に合わせたケアプランも手渡している。母子手帳交付は総合保健センターで行っており、妊娠届けを受け取った病院などで配布したアンケートに必要事項を記入の上、来所してもらう。

妊産婦と子ども支援のため、多機関・多職種連携による個別ケア会議とちとせ版ネウボラ会議（全体会議）で、関係者間の情報共有なども図る。

千歳市総合保健センターに、ちとせ版ネウボラとして面談室2部屋。

産後ママ相談 産後2カ月までの産婦からの相談を受ける。

産後訪問 産後ケアの一貫として、7回まで受けられる。

子どもと妊産婦への支援。実態把握と支援で総合的な支援につなげる。平成29年度から、「子ども家庭総合支援拠点」を創設し、要対協とネウボラなどの連携をスタート。

児童福祉司の資格を有する児童相談所の所長経験者を、こども支援コーディネーターとして配置し、要対協の調整及び職員の育成のほか、家庭児童相談業務に関する助言や指導を行っている。

2. 利用者支援事業

特定型としての「子育てコンシェルジュ事業」、母子保健型としてのちとせ版ネウボラ「妊婦ネウボラ」と「こどもネウボラ」を実施。

子育てコンシェルジュは、ちとせっこセンターおよびげんきっこセンターで実施、子育て支援サービスの利用をサポートしている。さらに、訪問型子育て支援「ままサポート」も実施、子育てコンシェルジュが週1回、約2カ月間訪問し、子育ての相談や子育て支援サービスなどの利用につなげている。

ちとせ版ネウボラについては、1.を参照のこと。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

市内12地区それぞれにコミュニティ・センターを設置、地域住民による運営。うち4カ所は隣りに児童館を設置。

千歳市市民協働プロモーション事業による市民との協働事業の推進。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

各児童館で、地域団体や元保育士らのグループ、民生委員児童委員などによる子育てサロンやおはなし会開催。隣接したコミュニティ・センターで実施している地域子育てサロンと児童館の合同行事の開催も。

平成21年度から、「昔と今の子育ての違い」を知ってもらう「祖父母講座」を開催。

デイケアセンターでの子どもと高齢者の交流事業。

5. 地域保健福祉に関する協議体について

ア) 協議体の有無

有り

イ) 協議体がある場合の体系と陣容

平成29年度より、2層を5つの圏域として、それぞれに生活支援コーディネーターを配置、市域包括支援センターに、町内会、民生委員児童委員も入って協議体で協議している。

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

子育てネットワーク 市民活動団体「link〜つなぐ」もつどいの広場を市との協働事業として運営。平成31年度から子育てに関する情報発信事業も展開。

子育てママ応援会議 施策は本当に当事者に喜ばれているかどうかを把握するため、子育て中の方々や子育て世帯を支援する企業や市民団体、当事者団体、さらには自衛隊関係者が多いという市の特性から、女性自衛官などに委員を委嘱、母の現状と声を率直に聞き、施策に反映している。協議内容は千歳市子ども・子育て会議でも共有し、参考としている。

地元企業でイクボス宣言第一号であるパンと菓子メーカーの「株式会社もりもと」は、食を通じた子育て支援に取り組んでいる。平成28年に市と連携協定を結び、市内の認定こども園などの保育施設や学童クラブに卵・乳を使用しない、食物アレルギーに対応した「なかよしパン」を提供している。

食生活改善協議会 子どもの食育に関する教室を開催。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成についての、今後の予定

平成29年度から	第1層	社会福祉協議会	2.5名
	第2層	社会福祉協議会	5カ所に0.5名

合計5名を配置。

回答者：こども福祉部長 上野美晴さん

こども福祉部次長 島津一久さん

こども政策課長 久保田健司さん

こども政策課係長 井島秀司さん

こども家庭課長 藤木健一郎さん

子育て総合支援センターセンター長 磯部由起子さん

子育て総合支援センター主査（児童福祉担当） 近藤和江さん

福祉課長 茂木 憲さん

福祉課総務係長 大木克己さん

福祉課生活支援係長 佐瀬和夫さん

高齢者支援課地域包括係長 吉原 毅さん

母子保健課長 山谷奈奈子さん

母子保健課母子保健係長 金川律子さん

☆全国の先進事例から学び、「わがまちの実状」に沿った子ども・子育て支援施策として展開する、創意と工夫と熱意の千歳市。冒頭に示したように、人口増加策と子ども・子育て支援施策が両輪のように働いて、総合計画の目標達成を着々と成し遂げている。

母子手帳を受取る際の面談で渡されるのがネウボラファイル。千歳市

の子ども・子育て支援メニューに関する資料や、妊娠期、産後、乳児期、幼児期に受けられるサポートがすべて記載され、そこから自分にあった支援プランを作っていくシート、マタニティキーホルダー、ちとせ子育て特典カードなどがファイリングされている。大きいので持ち運びしやすいようにと専用のバッグが用意されている。

転勤による転出入が多いため、転入による「アウェー感」や不安を払拭させるべく、イベントなどを企画している。たとえば、転入後3年以内で、1歳から就学前までの子どもと保護者対象に、千歳市の街並みや市の子育て支援事業に触れながら、親子同士が知り合うきっかけになり、子育てって楽しいと実感してもらえるように、バスツアー「転入親子ウエルカム交流ツアー」を開催している。さらには、ちとせこセンターとげんきっこセンターでは、交流イベント「転勤してきた人あつまれ」を開催、子育て支援プログラムの説明などのほか、友達づくりの機会提供にもなっている。

平成29年1月に、道内自治体では2番目となる市長による「イクボス宣言」を実施し、職員の働き方改革や父親の育児参画にも力を入れている。

市内の子育て中の父親で構成する「千歳市/パパの会」の活動も支援している。

子育て支援施策の体制強化を図るため、平成29年度に保健福祉部子育て支援室が、“こども福祉部”として独立した。

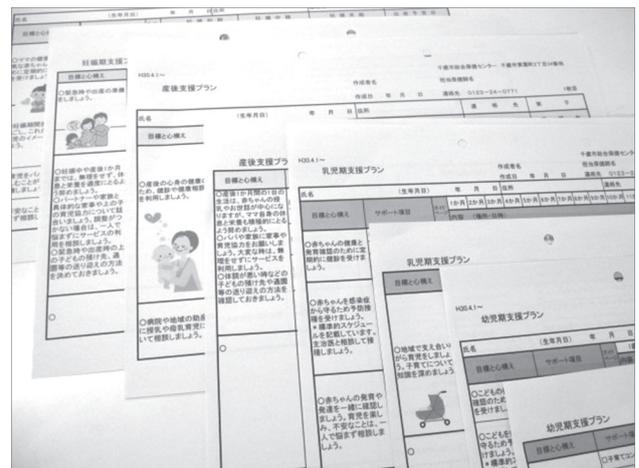
「ちとせ版ネウボラ」など子育て支援担当課と母子保健担当課との連携が必要となる事業については、部が別れる前に立ち上げ、独立後も円滑な連携が継続するよう心掛けたという。



千歳版ネウボラ・ネウボラファイルに綴じられたさまざまな情報



千歳市の子育てママ応援会議の中間報告書



千歳版ネウボラ・ネウボラファイルに綴じられたケアプラン

市民団体「link ～つなぐ」

団体基礎データ

所在地 北海道千歳市桜木1丁目

従業員数 6名

事業概要

これまでの事業の歩み 平成19年11月より、今に至る。

事業会計報告 有り

事業別利用者数と内訳 2017年度実績 20584名

事業の運営体制（スタッフ数など） 日常スタッフ 2～3名

実施事業サービスと法令との関係（ex. 介護保険、子ども・子育て支援新制度事業）

設置および運営財源 市からの運営補助金

1. 主たる事業

0～6歳（就学前）の子どもと親が気軽につどう場所。

転勤者が多い町であり、核家族化が進み、子育てするママの負担が大きくなっている。つどいはママが一人で抱え込まず、共に悩み、考え、暮らしの不安も分かち合う仲間でありたい。

親も子ども多くの仲間や人との関わりの中で育ち合いたい場所を提供する。

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

平成20年4月に千歳市が「千歳市子育て総合支援センター」を開設するにあたり、子育て中の親子が気軽に集い交流する「つどいの広場」を市と協働で運営する市民活動団体の公募があった。代表大関が自身の思いである「子育てする親の気持ちに寄り添い、一緒に育ち合う」ことに共感できる仲間を募り、運営団体に応募、市の公開プレゼンテーションなどの審査を経て先行され「つどいの広場」を開始するに至った。現体制は8年目。

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかげ

- ・平成19年に大関は千歳市教育委員会生涯学習課のママさん教室の保育に携わる。その時のコーディネーターの方が、個人的に「やってみては？」と声をかけてくれた。
- ・10年間思いをひとつにして来た現在の「link ～つなぐ」のスタッフほか5名。
- ・何かlinkが事業を考案すると協力して下さる利用者の方々。（利用者の得意を活かした講座、父親が主導する講座、つどいの広場の装飾など、利用者が協力して企画、開催が実現した事業は多い。後片付けなど、日常的な運営でも、常に協力的）

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

- ・シフトでスタッフが活動しているので、前日の様子などは必ず「連絡ノート」に記載する。
- ・利用者個人記録を綴り、スタッフが替わっても、利用者がスムーズ

に利用できるようにしている。（10年間資料あり）

5. 地域における連携体制とその実情

・わたしたちの役割は「市民が求めていること」を行政につなぐことにある。

個人記録を綴っていることもあり、保健センターの保健師、他の子育て支援センターなどから情報を求められることが多い。

「つどいの広場」での諸々を「こどもセンターが知らない」ことはないように、常に情報共有を図っている。

4年目を迎えるちとせ子育てコンシェルジュとも情報を共有し、利用者によりよいサポートを提供できるように努める。

6. 行政からの業務委託の有無

委託ではなく協働。

千歳市市民協働プロモーション事業のため、3年ごとに市民協働プロモーション選考委員会に諮られる。

担当課はこどもセンターとなり、千歳市子育て総合支援センターと連携を持ち行う。こどもセンターは複合施設のため、こどもセンター、児童館、放課後児童クラブもある。

千歳市子育て総合支援センターとの関係を深めるとともに、合同の行事なども行う。今年度は教育委員会生涯教育課「ママさん教室」の一講座を担当する。「アウトリーチ」として活動を深めて、その場の方とつながって行きたい。

回答者：代表 大関恵子さん

ヒアリングを終えて

10年前、市立図書館の上で「つどいの広場」が開設、2、3年運営されていた。このときは市の非常勤職員が、運営していた。千歳市市民協働事業移行時に、市民団体「link ～つなぐ」が手を挙げ、現在のちとせこセンター（1階が認定こども園、2階に児童館、放課後児童クラブと併設）で「つどいの広場」を運営している。

1日平均80名くらいの利用がある。スタッフの数は1日最低でも2名で、6名のスタッフすべてが時間を融通しながら3段に分けたシフトに交代で入っている。お昼から午後にかけての真ん中の時間帯が最も利用者が多く、この時間帯は3人体制。最も利用が多かった年は、のべ26000人の利用があった。現体制は8年目。手を抜こうと思えば抜けられるが、大切にしたいところは大切にしたいとやってきた。大関さん自身は保育士資格を持っているが、資格の無いスタッフもいる。研鑽を積むべく、全員子育て支援員研修を受講している。

市内の子育て支援施設は住んでいる地区に関わらず、行きたいところに行ける。いずれも、わざわざ車を使って来るところ。駐車場は必須。つどいの広場の隣りがこどもセンターの事務室となっており、常に情報共有をはかるなど、お互いの計画、事業などを知らないという状況のないように、常に連絡は密に取っている。

新年度に向けて、新に4名を巻き込んで、市の情報発信事業を担うことが決まっている。素早くアクセスできるように、SNSを利用した情報発信。大関さん自身はSNSやインターネットに詳しいわけではないが、子育てを応援していることを、当事者により身近に感じてもらえる事業だと思っている。新しい事業に不安もあるが、「こどもと子育て家庭

を応援してくれる人がたくさん出来るといいな」とわくわくしている。「できないことが多く、周囲に頼るのが得意」という大関さん。つどいの広場で過ごすことで、利用者が自分を取り戻し、得意なことを活かしながらひろばを応援、協力してくれるようになっていくのが嬉しい。何よりそうした親の姿を、子どもたちが喜ぶ。ついつい頼って声がけすると、声をかけられた親たちも喜ぶ。「自分が必要とされるのって、嬉しい」

大関さんはこう締めくくった。

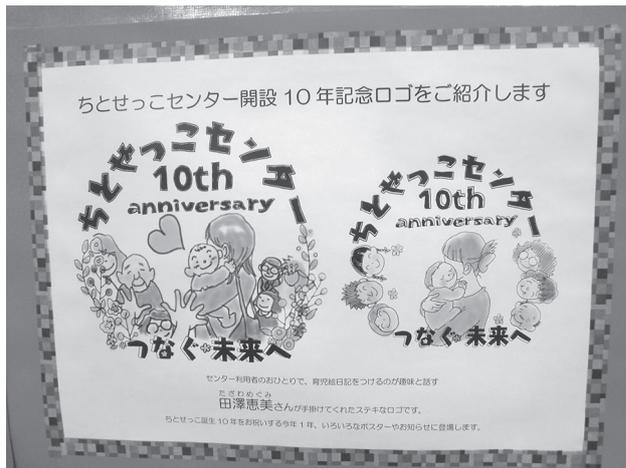
「私たちの役割は、市民が求めていることを行政につなぐこと」自分自身が子育て期に「やって欲しかったこと」を、今、実現させている。



link ちとせっこセンターつどいの広場パパ紹介コーナー



ちとせっこセンター



ちとせっこセンター 10周年記念ロゴ。つどいの広場の利用者さんが作成



link ちとせっこセンターつどいの広場



ちとせっこセンターでは、転入者が多いため、子どもの冬場の服装を展示している



link ちとせっこセンターつどいの広場スタッフ紹介